

おわりに

ここらでもういいんじゃないかな、と思うことがある。
“やるべきこと”を全うしたかと問われたら返事に迷うが、“応”と答えてもいいような気がしている。やれなかったことはたくさんある。やらなかったのではない。能力が及ばなかった。ここらで終止符を打っても、だから、悔いはない。

ロールスロイスには、乗る機会がなかった。オーストラリアのアデレードにジンギスカンを食べさせる羊牧場を開き、モーガンを駆って大陸を旅する姿を夢みたことがあった。

アフリカのサファリ旅行も、南米の秘境めぐりも実現しなかった。できれば南極もと考えたことがなかった訳ではない。

それが人生の目的たり得ないのは勿論だが、今や生きる力を産み出すエネルギーの素にもならなくなった。

世界は広い。知らないことはたくさんある。そのすべてを手にするなど誰にもできない。貪欲に求めたところで、どれほどのこともあるまい。

都会を知らずに生涯を終えるひとがおり、近代文明と称するものと全く無縁な生き方をすむ民族がいたとして、彼らを不幸と言えるだろうか。いずれ限られた時間と空間の中で生きるのだ。仮に、日本に生まれたことを嘆き、両親を恨み、社会を悪者に仕立ててみたところで、何も生まれて来はしない。

自分の世界を生きてきた。それが最も幸せな生き方と信じて。低いレベルの自己満足と言われればあるいはそうだったかも知れないが、それで満足だった。

夢は持ち続ければきっと叶う。喜びは探し出せ、いくらでも落ちている。持てるものがあれば世に還元して生きよ。己の能力を出し惜しむな。仕事は楽しくやろう、一日の三分の一を不愉快な思いで過ごすなんて愚だ。受け身になるな、やらされるのは苦痛でも、自らやれば達成感が味わえる。そんな思いで生きてきた。

しかし、いま、なぜか全てがむなし。

がむしゃらに生きてきたのは確かだが、燃え尽き症候群でもなければ、鬱とも違う。

人生が、生きるということが、いかに虚しいかはこれまでも多くの人が口にし、著してきた。今なぜかそれを、より身近に感じている。

日付は平成12年11月7日とある。およそ15年前、59歳の時にメモったものだ。今年74歳になった。

この間、ロールスロイスや羊牧場や南極は果たせなかったが、アフリカで野生の動物を見、アマゾンでピラニアを釣った。

病院を始めて30年が経った頃、「私が勝手に創（はじ）めた施設だから、後始末は自分しなければいけないと思っている」と恩師の古和久幸先生（故・北里大学名誉教授）に話したことがある。

「馬鹿なことを言うな。地元根差して30年、もはや個人の持ち物ではない。地域のひとたちの物であり、270余人の職員の物だ。佐久君が自由にしてはいけない」と厳しく諭された。

平成28年8月、十慈堂病院は創立して35年になる。

実にいろいろなことがあった。

人は思いどおりにいかない時や、奈落の底で地獄を見る思いをしてはじめて成長する。ウハウハと楽しく過ごしている時は、実は何も考えていない。

“苦勞は買ってでもしろ”ということわざがある。買うまでのことはないと思うが、困難から逃げてはいけない。

Subjectである。自分を見つめ直し、一回り大きくなるチャンスかも知れないのだ。

私は人生に“無駄”はないと考えている。遠回りしようが、足踏みをしようが、決して無駄ではない。

そう思えないのは“無駄にしている”からだ。

たくさん苦勞した。悔しい思いも限りなくした。その分、楽しいことは何倍にも感じた。

振り返ってみると、全てがいい思い出であり、貴重な体験だった。

つくづく思う。「だから、今がある」と。

トップ選手が10代でプロデビューする中、24歳でボクシングジムに入門し、25歳でプロデビューした元世界チャンピオンのプロボクサー・輪島功一さんの話。

28歳で世界ジュニアミドル級の王座につき、7度目の防衛戦で敗れた後も2度王者に返り咲いた。

34歳で迎えた最後のタイトル戦、11ラウンドでノックアウト負けを喫した。

「倒れた時、リングサイドのファンから『輪島、もういい。起きるな!』って、涙声が聞こえてきたんだ」

追記

「松本深志高校落雷事故」はあまりにもつらい出来事だった。やがて49年を迎える。『八甲田山死の彷徨』（新田次郎・新潮社）といった類の書き物として語り継がれていいと常々思っているが、本格的に書かれたものは見当たらない。私にはとてもそんな力はないので、本書を借り、かなりの紙面を割いて貴重な体験として記録に残した。（松本深志高等学校編纂の『独標に祈る』から多くを引用した）

「インフルエンザ騒動」に関しては、嫌というほどたくさんの新聞記事を書かせたが、新聞記者は、当然ながら小説とも週刊誌とも違う“書き方”で、うまくまとめるものだと感心させられた。一方で「医者殺すにゃ刃物はいらぬ。デマの一つも書けばいい」。私は死にはしないが、筆一本でひとの人生をいくらでもかき回すことができるマスコミの権力を改めて強く感じた。

これはしかし、あくまで私個人の想いで、本書の読者諸氏にはうんざりする内容であったに相違なく、読み飛ばしていただいてもいいし、差し支えなかったものである。

本を「あとがき」から読むという人がいる。筆者のように最後になってあれは読まなくてもよかったんだ、などという嫌味な書き手もいるから、後ろから読み始めるのは案外正解かも知れない。次回からはぜひそうされることをお勧めする。

だったら最初にそう書いておけよというお怒りを想像し、にんまりしながら、筆を置く。

平成28年4月1日（エープリルフール）

ご購入いただいた読者の皆様に、最後までお読みいただけたと信じて、心から感謝申し上げます。

渡部稲造氏・金子敦彦氏には編集のお手伝いでお世話になりました。

2015年1月に第30回梓会出版文化賞を受賞されたあけび書房の久保則之社長が、拙文の出版を快く引き受けてくださいました。本当にありがとうございました。